

ネクロマンサー少女は復讐を誓う

新谷奏

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小さな農村で暮らしていた銀髪紅目の少女の日常は突如終わりを告げた。故郷を焼かれた少女が出会ったのは魔術師、それも世にも珍しい死霊術師だった。

彼を師として仰ぎ力を手にいれた少女が目指すのは

——復讐だった。

目次

第一話	壊滅の故郷	1
第二話	略取	10
第三話	マギア・コントラクト	18

第一話 壊滅の故郷

「どうしよう……」

商店と商店の間の細い路地の暗がり。辛うじて風をしのげるかという隙間に少女はいた。体育座りをし顔を埋める。すぐ横の通りでは多くの雑踏が聞こえるが、足を止めるものはいなかった。暗がりには座り込む少女に気づかない訳がないが、あえて彼らは止まらなかった。この街に限らず帰る家のない子供は多い。ましてやここで一番大きな街であるこのハイデルンではその数も両手の指では足りないだろう。数ある不幸な子供の中の1人に過ぎない少女に特別何かしてやる理由など無かったのだ。

少女の体がぶるつと震えた。今朝がた降っていた雨が路面を濡らしている。それらが打ち水のようになって辺りに冷え冷えとした冷気を漂わせているが、少女が震えた理由はそれだけではないだろう。「お腹……すいたなあ……」

もうかれこれ2日は何も口にしていない。お金はただの銅貨一枚すら持っていないかった。街外れにある教会に行けばパンとスープを恵んでくれるし、あわよくば泊めてもらえるかもしれないというの家を持たない者たちの常識だったが、10歳ばかりの少女が貧困に直面したときの対処法など知るわけもない。

うなだれる少女を圧倒的な空腹感と絶望感が支配していた。

「どうして……」

誰に投げ掛けるでもない疑問が口をついて出る。どうしてこんな所でお腹を空かせていなければならないのだろう。どうして一人になってしまったんだろう。3日。そう、たったつい3日前までは両親と村人達と平凡で幸せな毎日を送っていたというのに。どうして……どうして……

己の理不尽に対する不平はいくらでもでてくるが、それで状況が好転するわけでもない。

よりいっそう縮こまった少女は自分がこんな目に遭うことになった原因の日——3日前を思い出していた。

——3日前：深夜：神聖ダルメニア帝国南部シュナイダー大公領
ニューベルク村

大陸の北部中央に位置する巨大な国家『神聖ダルメニア帝国』。その国家は無数の領邦によって形成され、中でも有力な8人の諸侯が選帝侯として存在していた。

つい先日12才になったばかりの銀髪紅目の少女、マリアは、選帝侯シュナイダー大公が治める帝国南部の閑静な農村ニューベルク村で暮らしていた。

農家を営む両親と3人暮らし。お世辞にも裕福とは言えなかったが幸せな家庭だった。父はよく農閑期に往復で3日はかかる遠くの街まで買い物につれていってくれた。茶髪や金髪が多い村で唯一の銀髪のマリアは近所の悪ガキに虐められることもままあったが、いつも優しく慰めてくれたのは母だった。そんな両親の愛情に応え、マリアはお手伝いできることは何でもした。

理想の家族像がそこにはあった。

その日もおつかいの仕事を元気いっぱいこなしてくたくたになつたマリアは屋根裏部屋でぐつすりと寝ていた。しかし、なにやら階下から聞こえてくる物音で目を覚ました。初めは両親が作業でもしているのかと思つたが大声で叫ぶ声も聞こえる。喧嘩でもしているのだろうか？

放っておいて寝ても良い。しかしめつたに喧嘩しないおしどり夫婦として近所で有名な両親がここまで大声でがなりたてているのは初めてのことだ。マリアには両親がどうして喧嘩しているのか知りたいという好奇心が芽生えた。

一階と屋根裏を繋ぐ細いハシゴ。それを通してあるのは床に小さく空いた四角い穴だ。しっかりと穴のふちに手をつくくと、そこからぴよこつと逆さまに顔を出した。

そのときマリアの目に飛び込んできたのは、甲冑の兵士に馬乗りになられ、くぐもった叫び声をあげながらめつた刺しにされる母の姿だった。突き刺した剣を兵士が振り上げるたびに、部屋には鮮血が飛び散る。

「……ッ!?!」

マリアは声を出さなかった。いや、驚き過ぎて出せなかった。髪を振り乱しなすすべなく悶える母を前にして、何もしてあげることができない。甲冑の兵士は何度も何度もその剣を母に沈めた。

マリアはその状況をただ見つめることしかできなかった。

◇

——どのくらい放心していたのだろうか

いつの間にか、兵士は消えていた。

部屋に灯っていた筈のランプも消えている。恐る恐る真つ暗なハシゴを降りると、足を床に着けた瞬間何かで滑って転んでしまった。

「いたたた……何これ？」

テーブルの上に転がっていたランプに火をつけて確認する。それは血だった。見回せば床に壁に天井に、おびただしい量の赤黒い血液が飛び散っていた。

「ヒッ……」

暖かい空間である筈の我が家とは思えない地獄の惨状に小さく声をあげる。胃の中から込み上げてくるものを必死に抑え周囲を観察すると、その血はある一点から放射状に飛び散っていることが分かった。そしてその中心には赤と黒で染まった物体があることに気づく。

マリアはそのぐちゃぐちゃの物体に恐る恐る近づいた。

「おかあ……さん……う？」

呼び掛けても返事はない。どこが顔かも分からないほど損壊し血濡れになったそれが生きている訳もなかった。

傍らに投げ出された腕をそつと握る。まだ暖かい。しかし、それがマリアの頭を撫でることも抱きしめることももうないのだ。

「うぐつ……」

あまりに酷い現実には、マリアは咽び泣いた。

——ひとしきり泣いた後でゆっくりと立ち上がり振り返る。するとその目線の先に机で隠れる位置、ちょうどドアの横の壁にもたれるようにして倒れている父の姿があった。

「お父さん！」

「グツ……」

すかさず駆け寄ると、父は僅かに呻き声をあげた。見ると腹に大きな切り傷がある。そこから血液がどンドン溢れでているのが分かった。

「お父さんっ！しっっかりして！すぐに助けるから！」

泣きわめきながら父の傷穴を力任せに抑える。しかし、その傷が致命傷であるのは素人目にも明らかだった。

「グウツ……マリア……か……？」

「そうだよ！マリアだよ！お父さん死なないで！」

マリアの必死の呼び掛けに意識を取り戻した父が顔をもたげたが、そこにはほとんど生気が残っていないかった。

「俺はもうだめだ……。マリア……。お前だけでも逃げるんだ……」

「いやっ！お父さんを助けるの！」

「バカなことを言うんじゃない……。グツ……。早く……。逃げるんだッ！」

「そんな……。そんなのヤダよ！」

「いいか……。よく聞くん……。ここから西に行ったところにハイデルンという街がある……。そこまでなんとか逃げろ……。この村はもう……。おしまいだ……」

娘を最後の力を振り絞って諭す父の顔は、みるみるうちに蒼白になっっていく。

「マリア……。愛してる……」

「私もよーだから逝かないで！」

父の目からだんだんと光が消える。

「生き……。ろ……」

「そんなっ！お父さん！お父さん！」

父の全身が弛緩し、もたげていた首はがくりと落ちた。薄く開いた目は、もう何も映してはいない。

マリアはただただ、その亡骸にすがり付いて泣いていた。

マリアは、ひとしきり泣いた後おもむろに立ち上がった。父の遺言を叶えるために。泣き腫らして赤い顔をキュツと引き締める。

扉を両手で抑えながら、そつと開いた。

「きゃああああ!!」

「なんだお前たちは!？」

「たっ助けてッ！」

「お母さーん…… お母さーん……」

外ではあちこちで悲鳴があがっていた。お隣の窓からはごうごうと勢いよく炎が上がっていた。そこにはいつもの暖かい村の雰囲気は微塵も無かった。

「行かないと……」

周囲に人がいないことを確認するとマリアは一目散に駆け出した。マリアの家は村の東の端にある。西の街道へぬけるには村の中を進まなくてはならない。あちこちで火の手があがり死体がそこかしこに転がる地獄の中をマリアは懸命に駆けた。



「止めてえ！止めてよオ！」

家を数軒分走りそろそろ村の中央に差し掛かろうとしたとき、すぐ横の通りから悲鳴が聞こえてきた。どんな惨状も無視して走り抜けると決めていたマリアだったが、その悲鳴があまりに近くから聞こえてきたので思わず足を止てしまった。家の物陰に隠れながら横の通りを覗くと、そこには少年、それも今まで散々マリアを虐めてきた悪ガキが地面に転がされていた。その横に立つ2人の兵士が面白そうに足蹴にしている。

「ははッどうしたボウズ？さつきみたいに抵抗してみろよ」

「あれは傑作だったな。ママを返せ、だってよ」

「ガハッ!」

兵士の1人が笑いながら少年の腹に蹴りを入れた。少年は蹴られたところを押さええのたうち回る。そんな様子をみて兵士たちは更に大きな声でばか笑いをする。

そのとき、少年が通りの先で見つめるマリアの存在に気づいた。必死に手を伸ばして助けを乞う。涙を流し涎を垂らしながら救いを懇願する。己のピンチを前にして相手が虐めていた相手かどうかは関係ないようだ。

「ああっ、だずげっ！ゴホッ！」

声もあげようと唸るが、先ほど腹を蹴られた影響でうまく声を出せないようだ。

幸いにして兵士はマリアの存在に気付いていない。少年が助けを乞う様子は、兵士の目にはただ呻きながら逃れようとしているようにしか見えないのだろう。

「あーあ、こんなガキに構っててもしょうがねえなあ。おい、そろそろ片付けて次行くぞー！」

「りよーかい。じゃちよつと下がつとけよ」

少年を虐めるのに飽きたのか兵士の1人が離れる。それと同時にもう片方がスラリと剣を抜いた。

「ひ、ひいっー！」

赤黒い血でヌラヌラと光る剣を見た少年は途端に震えだした。少しでも逃げようと必死に後ずさる。

だがそんな様子はお構い無しに兵士は剣を大きく振り上げ、そして——勢いよく振り下ろした。

ザシユツという音とともに少年の首が跳ね飛ぶ。一瞬見えた顔は恐怖と驚愕で塗り潰されていた。

数瞬遅れて体の方の断面から真っ赤な血が勢いよく吹き出した。まだ止まっていない心臓の拍動に合わせ、強く、弱く、強く、弱く、リズムカルにその赤のシャワーを撒き散らす。噴出する勢いは段々と

弱まり、ただポタポタと垂れるだけになった。



「はあッ、はあッ、はあッ——」

例の惨劇から逃れるようにマリアは走っていた。あの少年の次は私かもしれない。少しでもあの兵士たちから離れておきたかった。

村の中央には兵士たちがたくさんいた。だが、村人を十字架に吊るして槍で突く者、柱にくくり油をかけ火をつける者などそれぞれが思い思いの方法で虐殺することに夢中だった。そんな兵士たちの隙を伺い、中央から一本外れた通りを駆け抜けたマリアの存在に気づく兵士はいなかった。

——あと少しッ、あと少しで西の出口につくッ！

そう少し気を緩めてしまったのがいけなかったのだろうか？

横の通りからマリアの進路を塞ぐように3人の兵士が飛び出してきた。上手く隠れながら走っていたつもりだったが、隣の通りを走るマリアを目ざとく見つけていたようだ。

「おやおや可愛いお嬢さん。そんなに慌ててどうしたんだい？」

「かなりの上物だな。こりやこのまま殺すのは勿体ない。何発かぶちこまねえと」

「おいおいそう焦るなって。妄想は獲物をしっかりと捕まえてからだ」

下劣な言葉を並べながら兵士たちがにじりよる。あまりに近く、胸についた薔薇とペガサスの上等な紋章がはつきりと見えた。

マリアは己の身に迫る危機を感じながら、しかし恐怖という感情は全く無かった。代わりにマリアを支配していたのは——怒り。

——お前らみたいなの……お前らみたいなのゴミにお父さんとお母さんは殺されたんだッ……！！

マリアは優しく、高潔な両親がこのような卑しい者たちの手にかけたことが許せなかった。立ち尽くし下を向きながら、身を焦がす

ような怒りで体を火照らせる。全身の毛が段々と逆立つのを感じた。「おいちよつと待て。こいつの銀髪……もしかして指令にあつた対象じゃねえか?」

「まじかよーじゃあなおさら慎重にお捕まえ申し上げないとなー!」

「こりやお手柄だぜ! 3人仲良く昇進かもな!」

自分勝手にベラベラとしゃべる兵士を無視し、怒りの感情に身を任せる。

——村の人も……たくさん死んだんだツ!

心の底からとめどなく沸き上がるようにどす黒い憎悪が精神を埋め尽くす。悪意が、殺意が止めどなく溢れる。——胸が……熱い……

「よーしよし、そのまま大人しくしててねえ……」

にじりよる兵士たち。だが次の瞬間、マリアが顔を上げたツ——

「お前ら全員ツ、許さないツツツ!!」

マリアの咆哮に空気が振動するツ。地面が揺れるツ。兵士たちはマリアを中心として放射状の黒いオーラが飛んだような錯覚をおぼえた。

しかし、それ以上なにも起こらない。いきなりの絶叫に一瞬はたじろいた兵士たちだが、すぐに冷静さを取り戻した。

「おいおい、初対面の相手に対するマナーがなってないなあ!」

「しつかり教育してやらねえとな!」

「おいっ、さっさと縛り上げるぞ!」

縄を手にした兵士たちは、こちらを睨みつけるマリアに手を伸ばす。だが、彼らがマリアに触れることは叶わなかった。

「なツ!」「ああツ!」「ガツ!」

短い悲鳴をあげた兵士たちはまるで体の中に爆弾を仕込まれたかのように爆発四散した。周囲に鮮血と肉片を撒き散らし、その場に真つ赤な華を咲かせた。

マリアは悪逆の限りを尽くした彼らの突然の呆気ない死に一瞬放心した。しかし、理由は分からずともこれが幸運な事に変わりはない。血液と内臓が混じったぐちゃぐちゃの肉塊に一瞥もせず、マリアは西の出口へと走った。



——どのくらい走っただろうか？街道をいくらか進んだところで足が止まってしまった。

「はあッ……はあッ……」

息が切れる。もう走ることはできない。それぐらいわき目もふらずに走ったのだ。

ゆつくりと振り返ったマリアの眼下には、あちこちで燃え盛り崩れゆく、阿鼻叫喚の地獄と化した故郷が広がっていた。キラキラと光る甲冑の兵士たちが豆粒のように見える。

——お前たちなんて、いつか、いつか……

血走った目で彼らを見つめるマリアは肩を震わせた。

「……行かなきゃ」

いくらかして、マリアは踵を返すと足早に歩き始める。彼女が振り返ることは二度となかった。

第二話 略取

——ぎゅううぐるるるるるる

少女のお腹が大きな音を鳴らす。その小柄な体軀からは考えられないほど低く響いた音に、少女自身も驚いたように目をぱちぱちした。

既に日は落ち、通りを行き交う人もまばらになつてきた。今座り込んでいる路地の両隣の店も、今日の営業は終了したようだ。先ほどまで漏れていた明かりが消えている。

「はぁ……」

疲れ果ててしまいため息しか出てこない。体を襲う強烈な倦怠感が、もう限界が近いことを知らせていた。

「泥棒……するしかないかなあ……」

本当なら盗みなど絶対にしたくない。してはいけないと誓っている。両親に優しく廉直な子になるようにと育てられたマリアの良心が、その行為を許さないのだ。

だが、自分が悪人になるのを避けた結果ここで野垂れ死ぬのは勘弁だ。

「あいつらを倒さなくちゃいけないんだから……」

——村を襲った兵士たちを倒すまでは絶対に死ぬ訳にはいかない。悪いことは悪いこと。でもそれで死んでは本末転倒だ。自分の良心に従いたい気持ちはあるが、それに固執するほどマリアは頑固な子ではない。村を出て3日、街に入って1日。限界が近く、いよいよ真人間の道を外れる決心がつくには十分な時間だった。

そうこう思案しているうちに辺りは良い感じに暗くなってきた。ここらには街灯も無くなり暗い。人通りも無く少し怖いが、逆を言えば人目を忍んで活動するにはちょうど良いということだ。

気は引けるがこれ以上先延ばしにも出来ない。とりあえず隣の商店に入ろうか、と重い腰をあげたその時だった

「嬢ちゃんー！こんなところで何をしてるんだ!？」

「ヒッ……、ごめんなさい！」

突然の怒声に驚いて声の方に向かって謝った。思わず謝ってしまったが、よくよく考えたらまだ盗みに入っていないんだから謝る必要はないのでは？

そんな言葉を飲み込みながら声のした方を見ると、暗がりの中からくたびれた衣服を纏った大柄の中年の男が現れた。おじさんは厳つい顔でマリアを見下ろしながら口を開いた。

「こんな時間に子ども一人でなにしてるんだ？ここら辺は人さらいも出る。早く家に帰りなさい！」

「あ、あのそれが……」

家が無いんです、と言おうとしたが慌てて飲み込む。知らない相手に弱みをみせて、そこに漬け込まれたくはない。

「なんだ？一人で帰るのが怖いならおじさんが送っていいんか？」

おじさんの低い声が路地に響く。こちらを覗きこむ目は真剣で、とても心配してくれているのがよく分かった。大きな声と体に気圧されてしまったが、なんだかいい人そうだ。最初は警戒していた気持ちも徐々に薄らいでいく。

「その……家が無いんです……今晚だけで良いので泊めていただけませんか？」

一度飲み込んだ言葉を吐き出し助けを求める。盗みに走ろうとするほど限界な状況で、この優しそうなおじさんを警戒し続ける気にはなれなかった。

おじさんはマリアじつと見つめ、それから頭の前から爪先まで値踏みするように眺めた。それになんの意味があるかは分からなかったが、せいぜいお行儀良く見えるように胸を張る。

しばらく黙ってマリアを見ていたおじさんだが、やがて何度か頷いた。

「うん、大変だったな。是非おじさんの家に来ると良い。明日からのことはそれから考えよう」

そういうと、握手のつもりだろうか？手を伸ばしてくる。マリアは嬉しそうにその手を握り返した。

「ありがとうございます！あつ、私 MARIA って言います！よろしくお願ひします！」

「ああ、おれはゲイルだ。よろしくな」

笑顔の MARIA に釣られるように、ゲイルもその厳つい顔を緩めた。

◇

真つ暗な通りをゲイルについて歩く。通りを少し行つてから細い路地に入り、それから何度か右に左にと曲がった。高い建物で入り組んだ路地は方向感覚を狂わせ、さっきいた通りがどちらなのか見当もつかなくなつてしまった。

「あのう……ゲイルさん……この道で合っているんですか？」

どんどん細く狭くなる路地に不安を覚え、ズンズンと先へ進む大柄な背中に尋ねる。

「なんだ嬢ちゃん、怖いか？心配しなくてももう着くぞ」

振り返りもせずになんか言う、ゲイルは角を右に曲がった。MARIA もそれに続く。

ある程度進んだところで、ふいに路地の一角にある建物の前でゲイルが立ち止まった。

「ほら、着いたぞ。ここが俺の家だ」

建物は古く汚れた印象を受ける民家だった。MARIA は父に連れられて行つた街で民家を見ることは何度もあつたが、ここまで汚れたものは初めて見る。夜の暗さも相まって、かなり不気味だった。ドアを見ると中からうっすらと明かりが漏れている。中に誰か居るのだろうか？何人かの話し声も聞こえてくる。だが窓がないので中の様子を知ることができない。

「さきつ、入った入った」

ゲイルはドアを開くと様子を伺う MARIA の背中を押すようにして中に入れた。

「おうゲイル！遅かつたじゃねえか？……ん？」

「なんだ？そのガキは？」

中にはこれまた中年の男が2人いた。その口調のとおり格好も小汚ない。はつきり言つて怖い。

——でもゲイルさんの知り合いならこれでも優しいのかな？

だが、そんな期待はすぐに打ち砕かれた。

「そこで拾ってきた。なかなかだろ？うちの商品に銀髪はいなかったからちようど良い」

後ろから響く冷たく低い声に振り返ると、ドアの鍵をかけたゲイルが入り口を塞ぐようにして立っていた。その顔に笑顔は——無い。

「ああゲイル。こいつあ最高だ。まだまだガキだが、将来は立派な商品になるぜ」

「いや、一部のお客にはもう売り出せる。なんにせよどこでこんな上物見つけたんだ？」

「表の通りだ。浮浪児だから衛兵にばれる心配もない」

——なんの……なんの話をしてるの!?

こちらをなぶるような視線と気色の悪い会話に背筋が凍る。ひどく淀んだ空気から逃れるように出口を探すが、狭い部屋の唯一のドアはゲイルがしっかりと固めていた。

「なあ、こいつを商品にする前に俺らで一発ヤツちまわねえか？俺こんな良いのお目にかかったのは初めてだ！」

「なんだおめえガキが趣味だったのか？まあでも気持ちは分かるな」

「ま、とにかく縛り上げるぞ！」

目の前の2人がジリジリと迫ってくる。思わず後ずさるが、急に頭を後ろから捕まれた。そのまま凄い力でねじ伏せられる。

「痛いッ！やめてッ！」

「チツ、うるせーな。おい！さつきと口に布を詰め込め！」

「分かってるよ！オラッ！」

「……ンツ！ン……ツ！」

床に抑えつけられたままほとんど抵抗もできずに口に布を押し込まれた。声を出せない。最初に大声で助けを呼ぶべきだったと激しく後悔した。

「おいッ！暴れんじゃねえッ！」

「一発蹴りいれるッ！」

「——んうッ!？」

腹に激しい衝撃が響く。脳が真っ白になり、さつきまでがむしやらに振り回していた手足が硬直してしまう。

男達はその隙を見逃さず、素早くマリアの両手両足をロープで縛り上げた。

「よし、落着だな」

「ガキの癖に手間かけさせやがる。後でお仕置きだな」

「商品を壊すんじゃねえぞ？それよりこいつを地下に運ぼう」

そう言うと、男の1人がテーブルを動かした。テーブルクロスで隠れていたため見えなかったが、そこには正方形のハッチがあった。男はガチャリという音とともにそれを持ち上げた。

ゲイルに抱え上げられハッチの中に入る。下へは暗く狭い階段が続いていた。

階段を降りきると、小さな扉があった。ゲイルはそれを片手で開けた。中は真っ暗で何も見えない。

「おいつ新人だぞ！仲良くしてやれっ！」

そう言うと、担いだマリアを部屋の奥へと放り投げた。

「ン”ッ！」

背中を激しくうち、息が詰まる。しばらく床でのたうっていると、男が1人、燭台を持って部屋に入ってきた。そのおかげで、今まで見えなかった部屋の全容が浮かび上がった。

「……!?!」

——部屋にはたくさんの女達が寝転がっていた。全員全裸で両手両足をロープで縛られている。誰もがその体に痣などの痛々しい傷をつけていた。

「ン”、ン”……」

酸っぱくきつい匂いが鼻につく。目の前の恐ろしい惨状と相まって吐き気が込み上げてきた。

「どうだいマリアちゃん？先輩達に会った感想は？」

「よーし！先輩達と同じように、服を脱ごうねえ！」

ゲイル達が近づいてくる。勿論逃げ場なんてない。マリアは必死に後ずさるがついに部屋の端まで来てしまった。

2人の汚い手がマリアを掴もうとゆっくりと伸びてきて——
——ドオオオオオンツ!!!

爆発音とともに突如地面が、いや部屋全体が揺れた。男2人も手を引っ込め辺りを見回す。

「なんだア……う？」

「爆発……？」

2人が上の様子を確かめようと地下室のドアに近づいた時だった。

コツ……コツ……。ゆっくりと地下室への階段を下る音が響いてくる。もう1人の男だろうか？

「スコット！何があった!？」

ゲイルが階段に向かって呼び掛ける。——だが返事は返ってこない。

階段を下る音が消え数瞬、扉の影から男が姿を現した。だが1階に残った男ではない。全くの別人だった。ヨレヨレの真っ黒なコートを身に纏った男はゲイル達の方を向くと、ぬうつと顔を上げた。何を考えているかわからない無表情だ。

「残党は2人か……案外大したことないな」

「おいてめえッ！何言ってやがるッ！」

「生かしちゃおかねえぞ！」

男は、突然の侵入者にいきり立つゲイル達に全く怖じ気づくことなく、影のように佇んでいる。

「ぶち殺してやらあつ！」

そんな男の様子に痺れを切らしたゲイル達は腰にあった短剣を勢いよく抜くと、男に飛びかかろうとした。

その瞬間、男はコートを翻し——ニヤリと嗤った。

『*servus cadaveribus pugnatur*
忠実なる死の従者よ』

静かにそう呟いた直後、床に紫に光る魔方陣が浮かび上がる。そしてその中心から暗く怪しいオーラを纏った骸骨が姿を現した。手には真っ黒な長剣を携えている。

「すつ、スケルトンだ?!？」

「なんでこんなとこ——」

男が言い終わる前に、スケルトンはその手に持った長剣で男の首をはねた。首の断面からは、シャーシャーという音をたて勢いよく血液が吹き出す。

男の体はしばらく鮮血を撒き散らした後、ゆっくりと前屈みに倒れた。

「ヒッ、ひいひいっ！くるなあッ！」

残されたゲイルは屍餅を着くと、短剣を放り出して泣き叫んだ。

だが、スケルトンは剣を振りかぶりながらゆっくりとゲイルに近づく。

「た、助けッ——」

命乞いも虚しく、スケルトンは振りかぶった長剣を勢いよくゲイルの頭部に突き刺した。一瞬で絶命したゲイルの体はビクビクと痙攣し、その股間からほのかな刺激臭を漂わせる。

スケルトンは剣を素早く引き抜くと、そのまま暗いオーラと共に霧散した。

◇

「ふう」

男が息ついたことで、それまで放心していたマリアは意識を取り戻した。そして、目の前に転がる2つの死体を確認することで、この男がゲイル達を倒したことを改めて認識した。

「あーあ、こりやひでえな。仮にも大切な商品だろうに」

男がパチンと指を鳴らす。それと同時にマリアや女達を縛りびくともしなかつたロープが弾けとんだ。両手が自由になったことで、マリアは口に詰められていた布をはずした。

拘束が解かれ一息ついたところで顔を上げると、部屋を見回していた男と目が合った。異様な術でゲイル達を惨殺した男は、彼自身も淀んだオーラを纏っていた。その死んだような目に射られ、マリアの体は強ばった。

だが、ただ恐怖しただけではない。マリアは男を尊敬するような感情も抱いていた。

——この男は、強い

マリアには無い、敵を圧倒する力をこの男は持っている。復讐を果たすどころか、ただの人さらいに負けてしまったマリアには、その力がとても素晴らしく輝いて見えた。

——あの力があれば……私は復讐を果たせる……

ならば、やることは一つだ。マリアはのそりと立ち上がる。

「お前はまだ元気そうだな。おい？大丈夫か？」

「……………さい……………」

「あ？」

マリアは大きく息を吸い込むと、聞き返す男をはつきりと見据えた。

「私に……魔術を教えてください！」

第三話 マギア・コントラクト

「いいか？まず体内の魔力の流れを意識しろ。そしたら両手を突き出して手のひらに力を集めるんだ」

「は、はいー！こうでしょうか？」

銀髪の少女——マリアがおどおどしながら両手を突き出し、深紅の瞳を不安そうに俺に向ける。手のひらを見ると、微かに魔力が集積されていることが感じられた。

「そうだ。そうしたら呪文を唱える。初心者が無詠唱で魔術を使うのは不可能だからな。『Combustione 燃烧せよ』だ」

「こ、こんぶすていおーね！」

マリアがたどたどしく呪文を叫ぶ。が、魔術は発動しない。大方呪文の詠唱が不足だったのだろう。初心者が正しく詠唱せずに魔術を行使するのは不可能に近い。正しい発音で呪文を詠唱することが魔術の第一歩なのだ。

魔術が発動しなかったことでマリアの顔が曇る。魔力が足りなかったかと思ったのか、さつきよりも必死に手のひらに魔力を集め続けている。

「正しく発音できていないんだ。よく聞け——『Combustione 燃烧せよ』」

「コンブステイオーネ！」

さつきより良くなったがまだ足りない。集め続けている魔力が少し揺れ動く程度に終わる。

「もつと滑らかに。——『Combustione 燃烧せよ』」

「コンブステイオーネ！！」

また少し魔力が揺れ動いただけで終わる。手のひらには更に魔力が集まっている。

「もつとだ。繰り返し返せ。——『Combustione 燃烧せよ』」

「コンブステイオーネ!!!」
「コンブステイオーネ!!!」

マリアが叫ぶたびに魔力は揺れ動く。詠唱を重ねるごとに揺れはだんだん大きくなる。……まで、こいつずっと魔力を集め続けてないか？

死霊術にも一般の4大属性の基本魔術と同じように適正が存在していて、たまたまそれが俺にあり、そして4大属性に適正が無かったというだけの話だ。

特殊な魔術なだけあって極めれば基本魔術よりも強力で、仕事をするには困らないのが救いだ。

魔術師は薄暗い部屋に籠って奇妙な壺に入ったゲテモノをかき混ぜていそうだというイメージを持たれるかも知れないが、実際はそうじゃない。

たしかに貴族や諸侯の支援を受けて研究に没頭しているお抱え魔術師、なおかつ変人ならあり得なくもないが、生憎俺はフリーだ。生きるためには魔術師だろうと稼がなくてはならないのが世知辛い。

さて、街の嫌われ者かつ一般の魔術師より少し強い俺に舞い込んでくる仕事というのは、言わずもがな荒事ばかりだ。

この街、ハイデルンはそこそこ大きな街だがいささか治安が悪い。日中大通りを歩く分には何の問題もないが、一步裏路地へ足を踏み入れればそこは裏稼業の者たちの巣窟だ。少なくない数のならず者やら奴隷商が潜んでいる。そして夜中は大通りだろうと人っ子一人出歩かなくなる。そんな街だから泥棒や誘拐は日常茶飯事。殺人だって多い。衛兵もいるにはいるが、いかんせん犯罪に対して人手が圧倒的に足りていない。とてもじゃないが対処仕切れないのだ。

よって『盗品を奪い返してきてくれ』とか『誘拐された家族を助けてきて欲しい』とかいう依頼が頻繁に舞い込んでくる。おかげで食うのに困ることはない。ならず者様々だ。

そんなわけで今日も『奴隷商に拐われた娘を助けてくれ』という依頼のもと、この路地裏へと足を運んでいるというわけだ。



日没後の薄暗い路地をいくらか進んだ所で足を止める。そして靴からあらかじめ依頼主から借りた救出対象の私物である衣服を取り出した。それを自分の前に掲げ、ある呪文を口にした。

『追跡せよ』

詠唱と同時に掲げた衣服がぼんやりと青白く光り、その光が複数に伸びる路地のうちの1つへと線のようにうつすら伸びた。

これは対象を追跡できる死霊術。対象の魂の残滓を辿り対象追跡するので。対象が移動した所をなぞるように、俺にしか見ることのできない青白い光の筋を伸ばす。移動してそれほど時間が経っていない、たくさんの人が通っていない、隠蔽工作されていない、などの条件があるが、それを満たせばかなり使える便利な魔術だ。対象の私物などを触媒とすることで精度を高めることができるため、今回は救出対象の衣服を触媒にした。

「ふむ……この角を右だな」

光の筋はこの先の角で右に曲がっている。光を辿り角を右に曲がった俺は、そこから先も導かれるままに道なりに進んだ。



——ある程度ど進んだ所で、光の筋は一つの建物の中へと入った。どうやらここが目当ての場所らしい。

「いかにも、って感じだな」

外観は薄汚れた、というか廃墟に近いような寂れた民家だ。壁は所々崩れひびが至るところに入っている。窓がないから中は確認できないが、外がこの様子ならおそらく中も酷いだろう。まあ本当に廃墟をアジトにしているのかも知れないが。

アジトの感想はさておいて仕事だ。救出対象がこの中にいるなら突入するしかない——そう思ってそつとドアノブを回すが、開かない。

「チツ、いっちょまえに鍵なんてかけてやがる」

律儀に戸締まりをしてるならず者に悪態をつく。こういう時おしとやかに鍵を開ける魔術を使うのも手だが、いかんせん面倒くさい。こっそり侵入するならまだしも今回は堂々と突入して敵をぶっ倒して救出する予定だ。

コソコソするつもりがないならお手^強軽^硬な方法^突を使えばいいじゃないか。

そうと決まれば早速右手を扉に向けて掲げた。発動させたい魔術を思い浮かべると、手の先に白い魔方陣がボワツと浮かび上がる。

スウつと息を吸った俺は、完成した魔方陣に素早く魔力を送り込んだ。

魔法陣に送り込まれた魔力は俺がイメージした通りの状態——光の濁流へと変換されそのまま目の前の扉をぶち破らんと直進した。

——ドオオオオオッ!!!

豪快な爆裂音共に目の前の扉——と崩れかかっていた外壁やら屋根の一部やらがまとめて吹き飛んだ。

使ったのは魔力をそのまま攻撃光線に変換して撃ち出す魔力砲。俺の練度なら詠唱無しでも使えるお手軽魔術だ。大した威力はないが雑魚やボロ家に穴を開けるならこれで十分だ。属性無しの脳筋な技と思うかも知れないが要は穴が開けば良いのだ。

「邪魔するぞ」

吹っ飛んだ衝撃で舞い散る埃や土煙を払いながら、俺はアジトに踏み込む。中は真つ二つに折れたドアやら家具の残骸がガレキのように積み上がっていた。ここまで崩壊していると、救出対象ごと吹っ飛ばしてないかと不安になる。

さつと半壊したアジトを見回すが幸い救出対象の死体はなさそうだ。だが敵の姿もない。外出中だろうか？

追跡魔術はまだ発動している。光の筋は一直線にガレキの中へと続いていた。

「おいおい、殺しちまってねえよな？」

若干焦りながらガレキをどけると、中年の男が仰向けになって失神していた。おそらく敵の一人だろう。救出対象じゃないなら生きてようが死んでようがどうでもいい。

男の事は放っておいて光の筋を辿ると、部屋の中央に穴が開いていることに気づく。どうやら地下室があるらしい。

中を覗きこんでみると——なるほど、狭い階段が深くまで続いている。

る。捕まえてきた商品を閉じ込めておくにはうってつけだろう。

さつさと仕事を済ますためにも早速階段を降りていくことにする。一人目の敵がああザマでは他の敵がいたとしても警戒するほどではない。

——コツ……コツ……と石造りの階段を踏み鳴らす音が狭い空間に響く。だんだんうつつすらと明かりの漏れている地下室の扉が見えてきた。

「スコット！何があつた!？」

階段を下りきりドアノブに手をかけたとき、地下室の中から男の声が響いてきた。予想どうりまだ敵がいたようだ。

特に呼び掛けに反応することなくドアを開け地下室に侵入する。部屋の至るところに拘束された裸の女が横たわっている。そして壁際のみすぼらしい男が2人、狐につままれたような顔をしてこちらを見つめていた。こいつらが残った敵だろう。予想より大分少ないが。

「残党は2人か……案外大したことないな」

「おいてめえッ！何言つてやがるッ！」

「生かしちやおかねえぞ！」

軽く煽つてやるとすぐに激昂した。ならず者はどうしてこう、感情の制御ができないのだろうか？賢いやツならここまですんなり侵入された時点で降伏なりするだろうに。

「ぶち殺してやらあつ！」

短剣を素早く抜いた男の一人が突進してくる。ここまで脳筋だと逆に可愛く思えてきってしまう。思わず自分の口角が釣り上がったのが分かった。

『*Servus Cadaveribus Pugnatur*
』忠実なる死の従者よ』

——詠唱するは魂を操りし呪文。魔力をのせた詞は妖しく輝く魔法陣を躡し、霊界へとその力を送り込む。正しく呼び出されし魂は仮初の肉体を与えられ、己が忠実なる従として顕現する。

「すつ、スケルトンだど!？」

「なんでこんなとこ——」

床に頭れた魔物陣から召喚された骸骨の魔物——ダークスケルトンは携えた長剣で、男が言い終わるのも待たずにその首を刎ねた。首を失った男は鮮血を撒き散らしながら前屈みに倒れた。

——死霊術『忠実なる死の従者よ』 霊界より魂を呼び寄せ様々なアンデットを召還する魔術。死霊術師ネクロマンサーの代表格といえる魔術だ。練度と魔力があればより高位のアンデットを召還できる。

まあ今召還したのは低位のスケルトンを少し強化しただけのダークスケルトンだが。

「ヒツ、ひいひいっ！くるなあッ！」

残された男は尻餅について必死に命乞いをしているが、妖しいオーラを放つ黒光りする骸骨は無慈悲にもゆっくりと長剣を振りかぶっている。

生憎奴隷商の生死は問われていない。絶対に殺す必要性は無いが、生かしてやる理由もない。

ザシユツ！という音ともにダークスケルトンは長剣を男の頭部に突き刺した。眼球を貫いた長剣は脳まで貫通し、男は瞬時に絶命した。

周囲を見回し敵を殲滅したことを確認した俺は、ダークスケルトンの魂を霊界へと還した。これにて仕事は落着。後は救出対象を連れていくだけだ。残りの奴隷の保護と後始末は衛兵にでも任せればいいだろう。

ふう、と息をつき横たわる女達の中から救出対象を探す。追跡魔術の光の筋は壁際に転がっている一人の女までまっすぐ伸びていた。勿論その女も他の女達同様裸にロープで拘束されていた。衛生環境も劣悪なのか全員が汚れてしまっている。

「あーあ、こりゃひでえな。仮にも大切な商品だろうに」

異臭に思わず顔をしかめながら指をパチンと鳴らす。同時に女達を拘束していたロープは弾けとんだ。風属性の魔法だが、この程度なら適正がなくとも造作もない。縛るものがなければ少しは楽になるだろう。

自分にできることはだいたい終えたところでふと部屋を見回すと、

隅っこで丸まっていた銀髪の少女と目が合った。この少女だけは服を着ているし意識もある。ついさつき連れてこられたといったところか。

「お前はまだ元気そうだな。おい？大丈夫か？」

のそりと立ち上がった少女に声をかけてやるが反応がない。もう壊れてしまったのだろうか？

「……………さい……………」

「あ？」

ぼそりとあまりにも小さく呟いた少女に、思わず乱暴に訊き返してしまう。

すると少女は大きく息を吸い込み、決意の籠った深紅の瞳で俺を見つめながら大きな声で言った。

「私に……魔術を教えてください！」

「……………は？」

◇

「……………は？」

私の放った言葉に呆れた様子の黒づくめの男。失礼なことに、面倒くさい者に出会ったかのような目で見下ろしてくる。だがここで引く分けにはいかない。

「は？ではありません！私に魔術を教えてくださいのです！」

「はあ……、そりやまたなんで…………？」

「そ、それは……………」

男から当然の質問が投げ掛けられる。復讐のために魔術が必要だと話したら、教えて貰えないのではないか？そんな不安が頭をよぎり思わず言葉が詰まってしまった。

答えられずにいると、男が半ば同情的な表情で口を開いた。

「その様子じゃ、ただの好奇心って訳じゃ無いのは分かる。誘拐されておかしくなっちゃった、つてのでも無さそうだ。何があつたかは分からないが、所謂訳ありってやつだろ？だけどな嬢ちゃん。別に何でも

かんでも魔術で解決するもんでもない。教会なりを頼れば生きてく事はできるだろうよ。なんなら教会まで送ってつてやる——」

「違うんですッ!」

思わず声を荒げてしまった。男の言葉の何が琴線に触れたのか自分でも分からないまま、感情に任せて怒鳴り散らす。

「確かに教会を頼れば生きていけることは分かりました。……でもそれじゃ駄目なんです! 私は私の大切な人達を奪った奴らが憎いッ! それを精算してやらなきゃいけないんです! 自己満足だつて何だつて、そうしなきゃ乗り換えられ無いんです! ——でも私には力がない……。だからッ——!?!」

そこまで一気にまくし立てて、男が呆気にとられた顔をしていることに気づいた。自分が言動を振り返り、きまりが悪くなつて思わず顔を背ける。

「……すみません、喋りすぎました」

「ああ。まあ大体事情は察した」

「……」

男は黙りこくつた私から視線を反らすと天井を仰いだ。

「良識のある大人なら、教会に引つ張つてくのが正解なんだろうが……俺が言えた話じゃねえな」

男はしばらく逡巡した様子で天井を眺めていたが、やがて視線を戻すと真剣な目で私を見据えた。

「2つ条件がある」

「?……はい」

男は真つ直ぐ私を見つめながら、右手の2本の指を立てた。

「まず1つ。俺は死霊術しか適正がねえ。一般的な4大属性魔術については大したことは教えられねえぞ」

「問題ないです」

適正だとかはよく分からないけど、その死霊術というものを教えて貰えばいいし、他の魔術も基本的なことを教えて貰えれば自分で練習できるかもしれない。

楽観的な考えだが、折角見つけたチャンス。この程度の不安要素で

手放す訳にはいかないと快諾する。

「じゃあ2つ目。対価だ」

「……対価？」

「そうだ。魔術師は契約において必ず対価を求める。それが原則だ。お前も魔術師になるというなら覚えておけ」

「なるほど……？」

「で、だ。お前は魔術の教えを請うに当たって何を対価とする？」

男に言われて自分の状況を整理する。今の私は服はボロボロ、所持金無し。家族も家も生まれ育った村も無く、おまけに労働力としての力も無い。呆れるほどの無い無いづくしだ。

今は何も払うことはできない。そんな状況下で望みを叶えるためにはどうすればいいか、必死に脳をフル回転させ——苦し紛れの答えを思い付いた。

「対価は……未来です」

「……未来？」

目を細めた男の品定めをするような鋭い視線が痛い。

「はい。今の私には家も、家族も、お金も……何もありません……。ですから、将来強くなって必ずあなたの役に立つと誓います！仕事だろうと、何か目的の為だろうと、あなたの為に働きます！」

「……」

男の視線がより一層鋭くなる。殺意でも混じっているように錯覚してしまうほどの重圧に必死に耐えながら、男の目を食い入るように見つめ返した。

——数分、体感では数十分に感じられた時間の後、不意に男が口を開いた。

「それは、俺にお前の人生を握られることになるぞ」

「構いません」

「そうまでして成したいことなのか？」

「はい」

そこまで問答すると再び無言になる。私はより熱意をこめて男を見つめた。

男は数分こちらを見つめた後考え込むように腕を組んでいたが、しばらくすると観念したように頭を掻きながらこちらに向き直った。

「はあ……お前のやる気は分かった」

「!?……それじゃ!」

「ああ、お前に魔術を教えてやる」

「やった!ありがとうございま——」

「だが——」

そこで男は顔を綻ばせて感謝の気持ちを伝えようとした私をを手に制した。

「お前が魔術を使えるようになるという保証はできない。こればかりは適正の問題だ。それにもし魔術が使えるようになったとしても、その時お前が俺の味方でいる保証はない」

「わ、私は裏切ったりなんか……」

「それをそのまま信用できない、ということだ。だから——これを使う」

男は腰の鞆に手を突っ込むと、茶色がかった一枚の白紙の紙を取り出した。見るからに希少な素材で作られていることが分かる、独特な存在感を放っていた。男はそれを左手で前に掲げると、右手をゆつくりと紙かざした。

不意に男がこちらを見た。

「お前、名前は?」

「え?マ、マリアです!」

「姓は?」

「ありません」

私……というか村の人は大抵名字が無い。教会の人や領主様みたいな偉い人は持つてるけれど、私たち平民にはいらぬのだ。

「そうか」

訊くだけきいた男は、自分が名乗ることもなく紙に視線を戻してしまった。こちらにも名前を聞き返してやろうと思ったが、男が紙を見つめるとも真剣な表情に思わず声をかけるのを躊躇ってしまった。

何をするのだろうか？不思議に思いながら男の手元を観察していると、突然紙が金色に輝き始めた。

神々しいオーラを周囲に放つ紙に、段々と文字が浮かび上がってくる。読み書きができない私にはさっぱりだが、なにか凄いことをしていることは分かる。

紙はしばらくの間輝きながら文字を浮かび上がらせていたが、急にフツとその輝きを収めた。何かを書き終えたようだ。

男は出来上がった紙を一通り確認すると、こちらに投げて寄越した。高級な紙に美しい文字が刻まれたそれは、まるで一つの芸術品のように見えた。

「あの……これはいつたい……？」

『制縛せし絶対約定』だ。魔術によって魂を縛り、そこに書かれた契約を必ず守らせる。絶対遵守の魔術契約^{マギア・コントラクト}。あとは一番下にお前のサインを書けば成立する」

言われて紙の一番下を見ると、確かに空欄があった。だが、読み書きできないので肝心の契約内容を読めないし、自分のサインも書けない。村では読み書きなんてできなくても困らなかつたし、当然契約書なんて書くどころか見たことすら無い。

「すみません……なんて書いてあるのですか……？」

「え？そのくらい自分で読め……ないのかそうか、そりやそうか……」
男がはあ……とため息をついた。なんだか悪いことをした気分だが、こればかりはしかたない。

「俺が代わりに読んでやる。だがお前はそれを信用できるか？本当は酷い契約が書いてあるかもしれないぞ」

「はい！信用します」

「ずいぶんあっさり信用するんだな……」

男が若干心配そうな顔をする。ゲイルに騙されたばかりですぐ人を信用するのめどうかと思うが、今の私には彼を疑う余裕が無い。それに私のことを心配した彼は、少なくとも悪い人ではないのだろうと思える。だから自信を持って信用すると答えたのだ。

「じゃあ読むぞ」

私から受け取った契約書を手に取ると、彼は静かにその内容を読み上げ始めた。

【制縛せし絶対約定】

フィデル・エリクソン及びマリアは、双方の合意を以て下記の契約を成立させる。契約は絶対遵守の掟となり対象を完全かつ例外なく制縛するものである。

— 契約 —

- ・フィデル・エリクソン及びマリアは師弟の関係を結ぶ
- ・フィデル・エリクソンは師匠として、弟子マリアに対し魔術及び必要とされる知識を教示する
- ・フィデル・エリクソンはマリアに対し、衣食住その他指南するに当たって必要なものを提供する
- ・マリアはフィデル・エリクソンの行動を補佐する
- ・フィデル・エリクソン及びマリアは、互いが敵対することはできない

以上、本契約の成立を証するため、フィデル・エリクソン及びマリア両名は記名のうえ、各一通を保有する。

帝国歴708年3月18日

『フィデル・エリクソン』

『』

「——以上が契約の内容だ。同意するならサインしろ。だが一度成立すればもう後には戻れないぞ」

「構いません。もとより、後なんてないですから」

「……そうか。ならこの空欄に名前を書くんだ。この部分の字を同じように書けば良い」

彼は文の一部を指差しながら契約書と羽ペンを手渡してきた。恐らく彼が指差している部分が私の名前なのだろう。

——覚悟は既に決まっている。羽ペンを手にとり、たどたどしく自

らの名を空欄へと刻んだ。

『マリア』

瞬間、契約書が先程以上の光量で発光する。私と彼を包み込むような黄金の光。魔力の奔流は絶対遵守の契約をそれぞれの魂に刻みこむ。

影という存在を一時的に消滅させてしまうほどの圧倒的魔術の輝きに思わず目を閉じてしまった。数瞬後、再び瞼を開いたとき——そこに2枚に分裂した契約書が浮かんでいた。

片方を掴み鞆に仕舞った彼は、もう片方を私に手渡した。

「これで契約は成立だ。俺とお前は師弟になった」

「はい！」

「俺の弟子になった以上強くなって貰うわなくては困る。根をあげるなよ」

「勿論です！」

思わず気分が高揚する。私は遂に復讐のための第一歩を踏み出したのだ。

少し浮かれ気分になったところで、あることをしてなかったことに気付き、右手を勢いよく差し出す。

「改めましてマリアです！よろしくお願いします——師匠！」

「……フィデル・エリクソンだ。よろしく」

師匠が私の手を取り軽い握手を交わした。

——こうして、ここに一人の死霊術師と少女の師弟が生まれた。